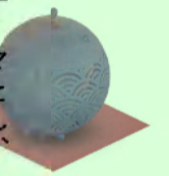


中村設計新聞

第七十八号

七月二十日(土)晴れ

今期は『時代』を土曜研修の年間テーマとし、七月は『大正時代』をとりあげ研修を行いました。



○はじめに

七月は建築家の藤井厚二が大正初期から昭和初期にかけて設計した、実験住宅の聴竹居へ見学に行きました。午前中は、彼が大正時代に設計した第一回から第四回の実験住宅を中心に事前学習を所内にて行いました。午後からは、彼が聴竹居へ見学に行き、ガイドの方から聴竹居について彼のこだわった点等を詳しく解説していただきました。大正から昭和へと移りゆく時代の中で彼は何を聴竹居に残したのでしょいか。

○スケジュール

- 事前学習
- 阪急 烏丸駅発
- 阪急 大山崎駅着
- 徒歩移動
- 聴竹居見学 (ガイド付)
- 現地解散



↑駅から住宅地を抜けた閑静な場所にある聴竹居へ

○聴竹居について

京都府大山崎町に建つ聴竹居は、建築家藤井厚二が一九二八年に建てた自邸で、彼は実験住宅として五回にわたり自邸を設計しては、建てて暮らしを繰り返し、「真に日本の気候・風土にあった、日本人の身体に適した住宅」を追求しました。五回目の実験住宅である聴竹居はその集大成ともいえるべき住宅となりました。



↑藤井家 家族写真



↑第3回実験住宅(1922)

彼は、住宅探求のために五つの実験住宅を手掛けます。第一回は神戸に、第二回目を以降は大山崎町に購入した土地(一万二千坪)に建てられました。現存するのは聴竹居だけです。彼は「其の国の建物を代表するものは住宅建築である」という言葉を残しました。風土に根ざした最もヴァナキュラーなものとして住宅を捉え、その探求の終着点として聴竹居を残したのです。

○レポート

広大で静かな土地に建つ聴竹居。四季があり地震国という日本特有の環境の中で、安全に快適に住むために計算しつくされた住宅でした。また、構造だけでなく住人や来客の視線・服装・使い勝手の良さに対して日本人らしい細かな配慮もされていました。現在は一般社団法人聴竹居倶楽部が維持管理をされています。毎日掃除をして大切に管理されているため、まだ誰かが住んでいるような空間でした。

永野 菜摘



○まとめ

聴竹居は細部までこだわりが感じられ関心する点が多々ありました。学んだことを設計に活かせたらと思います。この一年間は新元号に変わることもあり「時代」をテーマに充実した研修を行うことができました。

○土用の丑

当社の所長企画としてランチミーティングを行い、うなぎをいただきました。うなぎにはタンパク質やビタミン類が豊富に含まれており、夏バテ対策に今の時期にピッタリです。うなぎを食べて、京都の暑い夏を乗り越えたいと思います。ちなみにうなぎは、「万葉集」の時代から滋養強壯の食材として知られていたとか！



○中村設計新聞 十周年特集③

第十七号は、二〇一一年に「冬の京都を味わう」をテーマに嵐山・高雄へ行った記事でした。和菓子作り体験や暖房船で湯豆腐懐石料理を堪能しました。

中村設計新聞

この号の目次

- 土用の丑
- 中村設計新聞 十周年特集③
- クイズ
- まとも
- レポート
- 聴竹居について
- スケジュール
- はじめに

○クイズ

嵐山の名物として知られる桜餅は、つぶつぶとした歯触りの○○でこし餡を包んだものである。

- ①片栗粉
 - ②道明寺粉
 - ③そば粉
- 正解は、次回の中村設計新聞で！

前号のクイズの答え：③



↑ガイドの方から詳しく解説していただきました



↑縁側の美しい連続水平窓！



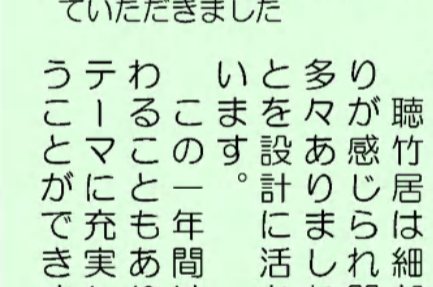
↑縁側越しに景色を望む読書室



↑落ち着いた雰囲気のある食事室



↑離れの閑室も特別に見学させていただきました



↑離れの閑室も特別に見学させていただきました

※写真は管理者の許可を得て、撮影及び掲載しております。